

Your Move!

SSP

Side Stand Project

寄り添い、
前進する



「乗れた！」その声もつなげたい

サイン・ハウスは SSP に協力しています。

B+COM
SB
6XR



B+COM
ONE



バイクに無かった文化を作り、バイクで作った文化を広げる

B+COMについて
くわしくはコチラ



バイクの世界で生まれ、バイクの世界で歩み続ける私たちは、「バイク乗り」として「あったらいいな」を求め、ライダーのバイクライフの充実を目指しています。商品企画、開発から販売・戦略に伴う宣伝・プロモーション、ご購入後のアフターサポートに至る迄、一貫して自社で行い、これまで培ったノウハウやフットワークの良さを生かし、他社に真似できない商品やサービスを作り出すことで、オンリーワン企業を目指します。

<https://sygnhouse.jp/>

● SYGN HOUSE



ひとつしかないこの地球。

いま世界中で「持続可能な社会」を実現していくための活動がうまれています。

ブリヂストンはこの2022年に“Bridgestone E8 Commitment”を定め、2050年に向けて、私たちらしい8つの「E」、私たちらしい8つの価値を、私たちらしいやり方で創出していくことで、持続可能な社会を支えることにコミットしていきます。

Energy カーボンニュートラルなモビリティ社会の実現を支えることにコミットする。

Ecology 持続可能なタイヤとソリューションの普及を通じ、より良い地球環境を将来世代に引き継ぐことにコミットする。

Efficiency モビリティを支え、オペレーションの生産性を最大化することにコミットする。

Extension 人とモノの移動を止めず、さらにその革新を支えていくことにコミットする。

Economy モビリティとオペレーションの経済価値を最大化することにコミットする。

Emotion 心動かすモビリティ体験を支えることにコミットする。

Ease より安心で心地よいモビリティライフを支えることにコミットする。

Empowerment すべての人が自分らしい毎日を歩める社会づくりにコミットする。

Bridgestone E8 Commitment to Our Future

ブリヂストンは、これまで以上に世界の課題と可能性に向き合っていきます。

未来の子供たちからの預かり物であるこの地球のために。みなさまと一緒に。

株式会社ブリヂストン

【お客様相談室】フリーダイヤル0120-39-2936
受付時間：月～金（祝日および指定休日は除く）9：00～17：00
www.bridgestone.co.jp

BRIDGESTONE
Solutions for your journey



バイクでの走行練習。クラッチをつなぐ瞬間に送り出し担当のサポートが、ゆっくりバイクを押します。併走してくれるので安心です

ここが大事！ 走ってきたバイクを支えるサポート「キャッチ」さんの登場です。ライダーもブレーキをかけて寸前で止まります。阿吽の呼吸！



練習が終わったらサポートさんたちの手によって降車。車椅子を使用するパラモトライダーさんは、車椅子へ誘導します



レベルを上げていくよ！

技量によりだんだんと補助輪の角度を上げていくことで、補助輪に頼らずバイクをバンクさせることを学びます。ターンもこのあたりから練習しはじめますよ

誰にとっても学びの場
SSPで人生を豊かにする

SSPはパラモトライダーとボランティアが共に創る場所です。パラモトライダーからボランティアスタッフに影響を受けることも多く、誰にとってもやりがいのある素敵な場所になっています。

まずパラモトライダーの方はLINEから登録。障がいの状態を詳しく伝えることで、専属メディカルが安全な参加方法を提案します。ボランティアの方も同じくLINEから簡単登録。バイク経験の有無は問いません。当日は講習でプロテクター装着の補助、シューズビンディングの取付け、乗車サポート、脚ベルト装着など必要な技術を学びます。パラモトライダーはバランスサイクルから始まり、補助輪付きバイクで直線からターンまで段階的に練習。インカムのB+COMで常に連絡を取りながら安全に進められます。共に笑顔になれる活動、参加をお待ちしています。

SSP用語集

- パラモトライダー**
障がいを持ちながらもオートバイに乗るライダー
- B+COM**
ヘルメットに装着する通信機器。インストラクターと常時会話可能
- ステップビンディング**
ライダーの足とステップを固定する特殊装置
- 脚ベルト**
ライダーの乗車位置を安定させ、脚の開きを防ぐベルト
- バランスサイクル**
バイク乗車前の練習用自転車。バランス感覚を養う

- リモート停止機能**
緊急時にスタッフがエンジンを遠隔停止できる機能
- SSP専属メディカル**
ライダーの障がい状態を確認し、安全を判断する医療スタッフ
- ステップアッププログラム**
段階的にスキルを向上させる独自のトレーニング方法
- 補助輪**
転倒防止のための補助装置。3段階で角度調整
- やるぜ!! 箱根ターンバイク**
SSPの年間イベント。公道走行の集大成となる場

SSPへの参加ハウツー



誰でも
参加できます

SSPは参加者とサポートのボランティアの両方を募集しています。ぜひこちらを参考に、次のSSPに参加してみてください!!



SSPへの
入り口はコチラ
LINEから



ビンディングステップは、自転車のビンディングを加工したもの。これと脚ベルトでマシンに身体を固定するので



最初は補助輪をつけてバイクの練習をしていきます。タイプ1〜3まで角度が違っており、タイプ1はバイクはほとんど傾かないので安心です



まずは
バランスサイクルで

バイクに乗る前にバランスサイクルで練習。健常者も体験できます。上半身だけでバランスを取るのちょっと難しいのですが練習すれば大丈夫



下肢に障がいがある方むけに、参加者の足にビンディングステップを取り付けます。これで足がバイクから外れにくくなり、安全に乗れます

トレーニングバイクの仕組み



障がいに合わせたカスタマイズ：右手が不自由なら左アクセル・左フロントブレーキへ、左手が不自由ならクラッチを右手に。障がいの状態に合わせて操作系を柔軟に変更できます



インストラクターが持つリモコンで、緊急時にバイクのエンジンを遠隔停止できます。パラモトライダーが安心して練習に集中できる、SSP独自の安全システムです



3段階の補助輪システム：補助輪は3つのレベルで調整可能。ステップ1は完全安定型、ステップ2は地面から15cm、ステップ3は30cmと徐々に難易度を上げて、バランス感覚を養います



たまたまクリスマスが重なって、長田さんがプレゼントを配る係に。教え子達は長田さん達に会える日を楽しみにしていた



車椅子バスケットは、健常者も参加できる。車椅子のコントロールスキルが問われ、さらに激しくぶつかりあう激しいスポーツだ

絶望の淵で出会った、 車椅子バスケットという希望

失意のどん底に突き落とされた長田さん。しかし、彼は決して諦めなかった。「できないことを考えるより、できることを考える」。その思いが、彼を新たな世界へと導いたのだ。その一つが、車椅子バスケットボールとの出会だった。

事故から数年後、長田さんは、リハビリの一環として車椅子バスケットを始める。「最初は、車椅子を漕ぐこともままならなかった。でも、なんか、これならできるかもしれないって思ったんだよね」

その根拠のない自信は、幼少期の体験に根ざしている。「危ないから触るな」と頭ごなしに禁止するのではなく、「触って痛い思いをしたら、自分でやめよう」と、あえて自由にさせてくれた父親の教育方針。「とりあえずやってみよう」というチャレンジ精神は、こうして育まれた。

仲間との出会い、 そして芽生えた新たな目標

車椅子バスケットを始めて、何より大きかったのは、チームメイトとの出会だったという。

障害、挑戦、ウェルビーイング ～長田龍司さんの場合～

Speaks out

「挑戦し続けることで、人生はより豊かに、より幸せなものになる」。これは、車椅子アスリート、長田龍司さんの言葉だ。バイク事故で下半身不随となりながらも、彼は決して諦めなかった。車椅子バスケット、ソフトボール、カヌー、チェアスキー……常に新たな挑戦を続ける彼の姿は、まさに「ウェルビーイング」を体現している。長田さんの挑戦の軌跡は、私たちに「自分らしく、幸せに生きる」ためのヒントを与えてくれる

「みんな、それぞれに障害を抱えながらも、前向きにバスケットに取り組んでいた。その姿に、自分も勇気をもらったんだ」

練習を重ねるうちに、長田さんは車椅子バスケットの面白さにのめり込んでいった。「最初は、シュートもドリブルも全然できなかったけど、練習すればするほど、できることが増えていく。それが嬉しくて、どんどん夢中になっていったんだよね」

そして、彼は新たな目標を見つける。「チームを強くして、全国大会に出場したい」。その目標に向かって、長田さんはさらに練習に励み、チームを引っ張る存在へと成長していく。

「バスケットは、チームスポーツ。一人じゃ何もできない。仲間がいるから、頑張れるんだ」

努力は、徐々に実を結び始めていった。彼の加入によって、チームは着実に力をつけていった。「長田が入ってから、チームの雰囲気が変わった」と、当時のチームメイトは語る。「彼の明るさ、何事にも挑戦する姿勢が、チーム全体に良い影響を与えた」。

ブテンとしてチームをもとめることができたんだ」

そうしてキャプテンとして、チームを力強く牽引していくことに。「キャプテンになったからには、チームを勝たせたい。その一心で、練習にも、試合にも、全力で取り組んだ」

挑戦の連鎖…バスケットから広がる、 無限の可能性 飽くなき挑戦心、 新たなスポーツへの挑戦

車椅子バスケットでキャプテンを務め、チームを牽引する存在となった長田さん。しかし、彼の挑戦は、そこで終わることはなかった。「バスケットで培った経験を、他のスポーツでも活かしたい」。そう考えた長田さんは、車椅子ソフトボール、チェアスキー、カヌーなど、様々なスポーツに挑戦していく。

「新しいことに挑戦するのは、いつもワクワクするんだよね。だって、自分の可能性が広がるんだから」

どのスポーツでも、最初は「車椅子の自分ができるのか」という不安がよぎるが、前向きにひた走ることと道が開けていく。「バスケットで培ったスピードやパワーは、ソフトボールにも活かすことができたんだよ。チームに貢献することができて、2024年日本選

車椅子バスケットが輝いた希望の光 突然の事故、打ち砕かれた青春

長田龍司さんにとって、バスケットボールとの出会いは、人生の大きな転機となった。しかし、その始まりは、決して輝かしいものではなかった。

かつて、長田さんはバイクに青春の全てを捧げていた。神奈川県内の峠で名を馳せた走り屋として、仲間たちと風を切り、限界に挑む日々。あの頃、長田さんにとって、バイクはまさに人生そのものだった。

しかし、栄光の日々は、ある日突然終わりを告げる。いつものように、愛車で走っていた長田さんは、不慮の事故に見舞われた。一命は取り留めたものの、脊髄を損傷する重傷。「脊髄損傷、下半身不随、もう二度と歩くことはできない」。医師から告げられた非情な現実には、バイクと共に生きるという長田さんの夢を、無残にも打ち砕いた。「あの時は、さすがに落ち込んだ。もう何もできないんじゃないかって…」

手権では初優勝することができた」と、彼は振り返って笑う。チェアスキーでは「バイクに乗ってた時の重心の取り方が活かされたし、スピードへの恐怖感も少なかった。チェアスキーを寝かせた所はバイクに乗ってたあの頃そのままだ。今夢中になってますね」

「1回見ればできるだろう」という根拠のない自信と、「できるかな、できないかな」ではなく「できるかもしれない」という前向きな思考で、次々と壁を乗り越えていった。

「とりあえず、やってみる。やってみて、ダメだったら、また別の方法を考えればいい。それだけのことだよ」

サーキットや峠などを走っていた長田さんは、全国的に雑誌を通して有名な街道レーサーとして育っていった





かつて一緒に走っていた仲間達の寄せ書きが記されたレーザージャケットで走る長田さん。仲間達も共に箱根を走る



長田さんの仕事は、車椅子スポーツを広めること。この日も小学校を訪れて、車椅子バスケットを試してもらおう試みをしていた

挑戦がもたらす、 精神的な成長と仲間との絆

長田さんにとって、挑戦とは、単にスポーツの技術を向上させることだけではない。それは、自分自身の精神的な成長にも繋がっている。「新しいことに挑戦することで、自分の可能性を広げることができる。そして、挑戦する過程で、多くの仲間と出会い、絆を深めることができるんだ」

それぞれのスポーツで出会った仲間たちとの繋がりを、今でも大切にしていると長田さん。「彼らは、私にとってかけがえのない存在。お互いに支え合い、励まし合いながら、一緒に成長していきたい。何か困ったことがあれば、いつでも相談に乗るし、力になりたいと思ってる」

次世代へ伝えたい、 挑戦することの大切さ

自身の経験を次世代に伝えるため、長田さんは小学校を回って講演活動も行っている。「子供たちには、障害の有無に関わらず、チャレンジすることの大切さを伝えたいんだ」と彼は言う。「生きてるうちは、色んなことにチャレンジしていい。軽い気持ちで一步を踏み出して、ダメなら諦めればいいし、良かったら続けられいい。その一歩が大事なんだってことを、伝えたいんだよ」

長田さんの言葉には、彼自身の経験

再び、風を感じて 新たな挑戦、そして未来へ 夢の続き

様々なスポーツに挑戦し、充実した日々を送る長田さん。彼の挑戦の根底には、常に「失ったもの」への想いがあった。「やっぱり、もう一度、自分の力で前に進みたい」。その想いは、彼を新たな挑戦へと駆り立てる。そんなある日、運命の出会いが訪れ

に裏打ちされた、強い説得力がある。「みんながサッカーをやっているから、自分もやってみよう」というような、他人の真似ではなく、自分の意思でやりたいことを見つけてほしいと訴えかける長田さん。「自分の人生なんだから、自分で決めればいい。失敗を恐れずに、どんどんチャレンジしてほしいね」

ウェルビーイング 自分らしく、幸せに生きる 充実した日々、 そして見えてきた「幸せの形」

現在、長田さんは結婚し、子宝にも恵まれ、充実した日々を送っている。「これ以上ないくらい、幸せな人生だよ」と彼は笑顔で語る。

そんな彼の姿は、まさに「ウェルビーイング」を体現していると言えるだろう。ウェルビーイングとは、身体的、精神的、そして社会的に満たされた状態を指す。長田さんの場合、車椅子バスケやその他のスポーツへの挑戦を通じて、身体を鍛え、精神的な充実感を得ている。また、スポーツを通じて多くの仲間と出会い、社会的な繋がりも深めている。

「障害があっても、自分らしく、幸せに生きることはできる。それを、多くの人に知ってもらいたいんだ」

る。常日頃側にいてくれる奥さんが「これなら、バイクにもう一度乗れるかもよ」とSSPの存在を見つけて教えてくれたのだ。「それは、以前に長田さんが情熱を捧げていた、バイクの世界に繋がるかもしれない」。そう聞いた長田さんは、胸の高鳴りを抑えられなかった。「これなら、自分もまた、あの時の感覚を取り戻せるかもしれない」。

半信半疑ながらも、長田さんはそのプロジェクトについて、詳しく調べることにした。長田さんは再び、自分の力で前に進むための道を歩みだす。最初は、その感覚を取り戻せるか不安だった。「正直、怖かったよ。でも、それ以上に、またあの時の自分に戻りたいという気持ちが強かった」

新たな挑戦、そして未来へ

「この挑戦を通じて、自分はまた、何でもできるんだって思えた。これは、他のスポーツにも良い影響を与えてると思う」

長田さんの挑戦は、これからも続いていく。彼の生き様は、私たちに「諦めなければ、夢は必ず叶う」ということを教えてくれる。「挑戦し続けることで、人生はより豊かに、より幸せなものになる。これは、障害があっても

長田さんのように、ウェルビーイングを実現するにはどうすればいいのか。彼は「ポジティブな思考」と「人との繋がりが」が重要だと語る。「失ったものを考えるより、残されたものを考える。自分にできることを考えればいいんだよ」

この言葉は、ポジティブな生き方の根幹をなすものだ。そして、挑戦する先々で出会う人々との繋がりを大切にすること、事故で失意のどん底にいた長田さんを救ったのも、バイク仲間たちだった。

「あの時、仲間たちがいてくれたから、今の自分がある。本当に感謝してる」長田さんの生き様は、私たちに多くのことを教えてくれる。障害の有無に関わらず、誰もが困難に直面することがある。しかし、そんな時こそ、ポジティブな思考を持ち、周囲の人々と支え合い、一歩ずつ前に進んでいくこと



車椅子野球にも挑戦している。車椅子バスケも同様だが、障害の重度によって差が生まれないように様々な工夫が凝らされている

右は緊張したというカヌー。左は障害者でもビーチを楽しむというイベントでの一コマ。とにかく積極的に向く！



長田さんはお子さんを授かったばかり。新しい家族と共に箱根を訪れた。SSPをみつけて長田さんに提案してくれた奥さんもちろん一緒

AutoRace.JP 
オートレースオフィシャルサイト

素敵な夢を見させてほしい。



そして、SSPを応援している飲食店さんも全力で応援しています☆



やるぜっ!!
箱根
ターンバイク

年に一度、箱根に集う。 パラモトライダーたちの 特別な挑戦

「やるぜっ!! 箱根ターンバイク」が3年目を迎えた。

台風の影響で11月30日に延期をし、初の冬開催となったが、全国から集まったパラモトライダーたちは、ひとたびバイクにまたがると、冬の寒さを忘れさせるほどの笑顔と熱気に包まれていった。

Photo: Hiromu Inoue



「箱根の魅力は風だ」ヘルメットを脱いだライダーがそうつぶやいた。冬の冷たい風が頬を撫でる感覚。カーブの傾斜を体で感じる瞬間。エンジン音が山肌に反響する響き。バイクを愛する者にとって箱根路が持つ魅力は尽きない。ターンバイクを走るライダーたちの表情には共通した喜びがある。それは「走りたい」という純粋な想いが形になった瞬間の歓喜だ。人それぞれに異なる身体の状態があるが風を切る感覚を求める気持ちは皆同じである。操作方法は人によって異なる。必要に応じて補助具を使うライダーもいれば、サポートを受けるライダーもいる。誰もがバイクと向き合い、箱根の道を自分のペースで楽しんでいく。その瞬間の風景と風を体感することに意味がある。「景色がよく見えた」というライダーの言葉に、毎年このイベントの価値が込められている。B+C O Mから聞こえる「景色最高だな」という声。それは同じ瞬間を共有する喜びだ。この日、箱根の空の下には、区別なくただ風を求めて走る人々の姿があった。

年に一度、箱根に集う。
パラモトライダーたちの
特別な挑戦



初めての冬開催、寒くても走り出せば関係ない。ライダーは空気の澄んだ冬景色を楽しんだ



MotoGPの舞台で名を馳せた青木三兄弟。SSPを立ち上げた三男・青木治親さん、次男・拓磨さん、そして長男・宣篤さんの3ショット。今年も揃って箱根を楽しんだ



会場ではビンストライバーのビートンさんが出店しヘルメットのチャリティーペイントを行った。さらにライダーと一部スタッフには作品が贈られた



閉会式では代表の治親さんに加えて、2年ぶりに参加した関口和正さんが1日を振り返るシーンも見られた



古谷卓さんは走行中にステップから足が外れるハプニングが起きたが、スタッフがフォロー。そのファインプレーに賞賛が上がった



ボランティアスタッフはチームに分かれてライダーをサポート。今年も怪我なくイベントを終えることができた



ヘルメットにはサインハウスのB+COMを装着。走行中に追走スタッフやライダー同士でコミュニケーションが取れるのも楽しみの一つ



今回は走行が1回のみと時間に余裕のあるスケジュール。走行後はライダー同士で団楽のひとときを過ごした

延期から約3ヶ月、
3年目は冬空の下で

障がいを持ったパラモトライダーたちと公道を走るという、SSP設立当初に掲げた夢を叶えた2022年を皮切りに、「やるぜっ!!箱根ターンバイク」は今年で3年目を迎えた。昨年は第1回目よりもさらに人員を増やし、1日に2回走行できるスケジュールで開催。今回もさらにパワーアップした状態で迎えるべく準備を進めていたが、開催日の9月1日直前に台風10号が発生。当日の安全面を考慮して、延期を決定した。3度目も開催できる、その安心感を碎く予想外の出来事が起きたものの、決して諦めず調整を重ね、新たな開催日は11月30日となった。

当日の天気は快晴。気持ちいいほどの冬晴れだった。気温は10度を下回る寒さだったが、会場に集まったパラモトライダーやSSPスタッフは、待つてましたと言わんばかりの楽しそうな表情で、開催できた喜びを噛み締めていた。

今年も昨年と同様、アネスト岩田ターンバイク箱根を貸し切って行なった。箱根大観山からスタートし、小田原料金所でUターンしてスタート地点へと戻る。片道約15km、往復30kmのコース

が設定され、その高低差は1000m。ぐっと冷え込んだ当日は、9月開催時よりも山頂と麓で気温差を肌で感じた。今年には各ライダー1回ずつの走行となった。今回参加したのは片麻痺、脊髄損傷を持つパラモトライダー14人。初めて参加する人、2回目の人、3年連続で参加している人とライダー層も厚く、各々がバイクに乗ること、箱根を走ることへの想いを当日1度の走行に懸けた。冬の冷たい風、澄んだ空気が木の葉が赤みがかった景色。冬を五感で感じるその瞬間は、新たな喜びや懐かしさを思い出させる。「過去一番景色が綺麗だった」と、ライダーたちは寒さを忘れて楽しんでいた。

一人の夢を叶える、特別な一日

ライダー同士、スタッフ同士の絆を深め、みんなで成し遂げる「挑戦」。全員が「丸」となり、安心して走ることが出来る環境が整っていたからこそ、今年も事故なく終えることができた。ライダーもスタッフも、全員が夢見て作り上げたイベントだからこそ「ああ、ここに来てよかった」と心の底から思いが込み上げてくる。



やったぜ!! Rider
丸野飛路志さん

右大腿切断 1/2以上欠損

1年の最終ゴールであり、
来年へのスタート

「今回は古谷さんとまがりさんと3人で走りました。インカムを通してみんなで景色が綺麗だねとか、自分が乗っているバイクのここが良いとか、お喋りしながらツーリング気分でした。毎年参加していて今回で3回目になりますが、毎回感動します。自分にとって年に1回の特別なイベントであり、ここに来ることを目標に過ごしています。今日が終わったら、また来年に向けて過ごしていく。1年の最終ゴールであり、来年へのスタートでもあります」



やったぜ!! Rider
野口 忠さん

脊椎損傷 L完全麻痺

ヘルメットに冷たい空気が入ってくる
この感覚を、久しぶりに思い出す

「3回目の参加です。時期がズレて、走るの寒い、嫌だなと思っていたのですが、走ってみたらすごく気持ちよかったです。冬にバイクに乗るとするのが30何年ぶりなので、ヘルメットの中まで冷たい空気が入ってくるこの感覚を、久しぶりに思い出しました。1回目は自分で走るので精一杯、2回目は追走の人や仲間、景色など周りをみながら走る余裕が生まれ、そして今回はさらに余裕を持って、ツーリング感覚で楽しむことができました。とにかく景色が綺麗だった!」

「やるぜっ!! 箱根ターンパイク」は、SSPとパラモトライダーたちにとって、バイクと一緒に公道を走るというひとつの大きな夢を現実にするための特別な時間である。今年で3年目を迎えたこのイベントは、参加者にとってすっかり「年に一度の楽しみ」として定着し、ますます大きな意味を持つようになった。



やったぜ!! Rider
栗本秀幸さん

脊椎損傷 Th2 完全麻痺

このプロジェクトを通してなら、
自分の夢が叶う

「寒かったけど、それ以上に楽しかった。冬の澄んだ空気で景色が美しく、綺麗に見えた富士山には感動しました。自分は怪我をして障がいを持っていました。それまでバイクに乗っていたので、怪我をした当初はもうバイクに乗れないのだと絶望して諦めていました。しかし、このプロジェクトを通してなら、バイクに乗りたいという自分の夢が叶う。自分1人ではできないことを叶えてくれる場所があるというのは希望です。本当に感謝しています」



やったぜ!! Rider
柴山善邦さん

脊椎損傷 第一腰髄損傷 完全麻痺

今までとは違う、
新鮮な気分

「初めて参加しました。スタート前も走っている間も、終始緊張していました。コースを折り返したところでようやく余裕が出てきて、ゴールした後はまず走り切ることができた安心感と達成感を噛み締めましたね。怪我をしてバイクを降りたのが30年も前なので、昔はこうやってバイクに乗っていたなと思い出しながらも、今までとは違う、すごく新鮮な気分でした。また来年も走りたいです」





お昼ご飯にはキッチンカー「FAT RAT DINER」さんが出店。美味しい焼肉弁当にライダーもスタッフも大満足



バイクに乗る前にSSPお手製の手押し自転車でもバランスをとる練習。初めてでも段階を踏んで練習するため安心



ファイブモータースクール上尾校に TENT を立て朝から受付を開始



SSP 専属の理学療法士・時吉がライダー一人一人の状態を確認。走行前にボランティアスタッフ全員にどんな障がいを持っているか共有される



走行後にはライダーとサポートスタッフで記念撮影。1日を通して信頼と絆が生まれる現場だった

「やるぜ!! 箱根ターンバイク 2024」からわずか3週間後、2024年最後となるSSPパラモトライダー体験走行会が、埼玉県上尾市にあるファイブモータースクール上尾校で開催された。年末の慌ただしさも感じられる中、50名ほどのボランティアスタッフが5人のパラモトライダーが集まった。ライダーはそれぞれ「完全麻痺」「視覚障害」「脳性麻痺」「脳血管疾患・右片麻痺の障がいを持った方々で、全員初参加。バイクに乗ることに対していささか緊張した様子だったが、当日は快晴で全体的に穏やかな一日となった。この体験走行会では、

まずライダーたちが、補助輪をつけたバイクにまたがり、マシンのバランスを取りながら走行する感覚を身につける。初めはスタッフがバイクを手で押してスタートからゴール地点までの直線距離を何往復かする。それらを繰り返して慣れてきたところで、実際にエンジンをつけた状態での走行に移る。ステップを1つずつこなし、バイクを操る感覚をつかんだライダーたちは、走行後に「これまでバイクの良さがわからなかったけど、実際に乗って感じるバイクの鼓動に感動した」、「バイクに乗りたいたいという夢を叶えることができた」などと話し、その表情は緊張がすっかり解けて喜びに満ちていた。



2024年最後のSSPパラモトライダー体験走行会が無事開催 緊張から感動へ、 初参加の5人が新たな一歩を踏み出す瞬間

障がいを抱える人々が持つ「バイクに乗りたい」という夢を叶える、
SSPパラモトライダー体験走行会。
2024年最後の開催となった今回は、初参加となる5人のライダーが集まった。



MAEDA JYUKOUGYOU

〒421-1212 静岡県静岡市葵区千代1丁目10番15号 電話：054-278-2850



**MICHELIN
POWER GP2**

ミシュラン パワー GP2

一般公道での高い安心感と
サーキットで優れたポテンシャルを発揮する
ハイグリップスポーツタイヤ



**MICHELIN
POWER 6**

ミシュラン パワー 6

意のままのライディングを可能とした
スポーツタイヤの新基準

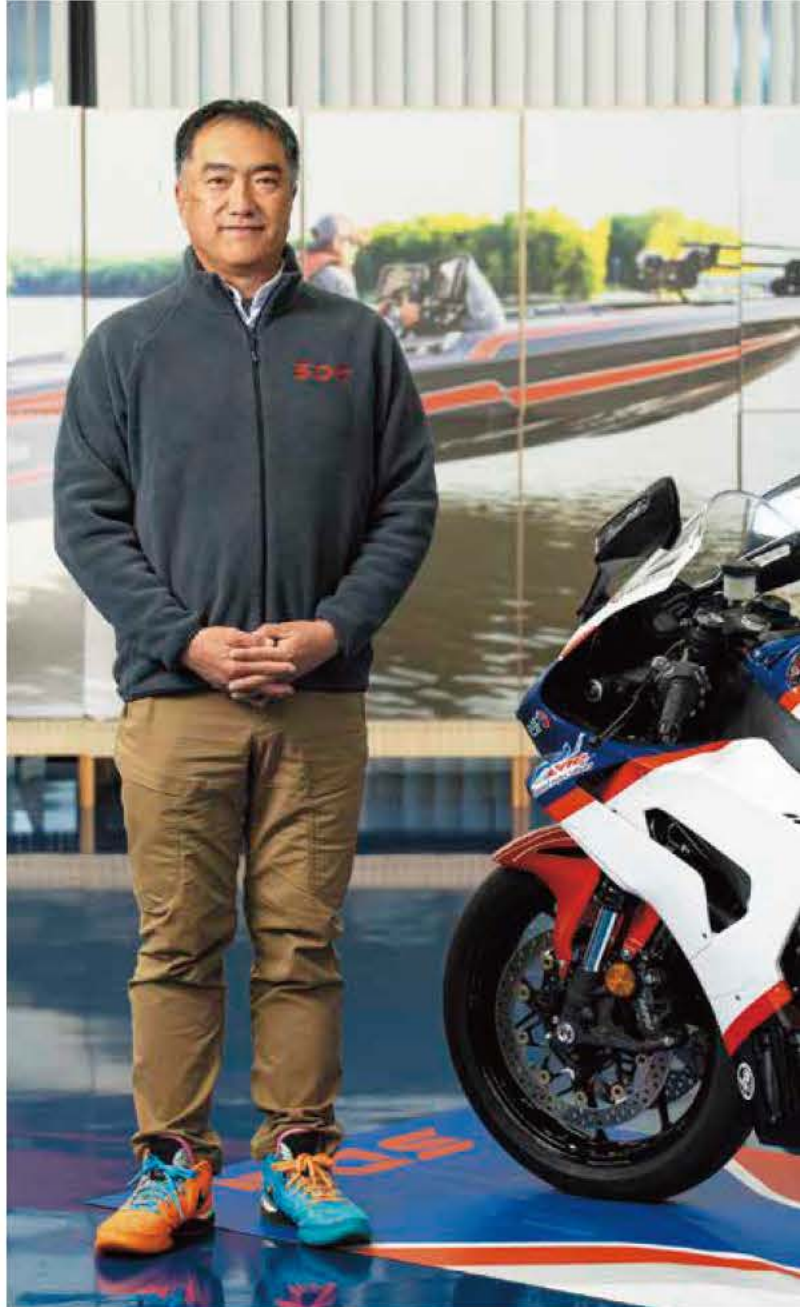


製品情報はコチラ
**MICHELIN
POWER GP2**
ミシュラン パワー GP2



製品情報はコチラ
**MICHELIN
POWER 6**
ミシュラン パワー 6





SDG株式会社

製造業の現場が抱える様々な課題を解決。工場の空気を入れ換え、集塵をするなど大規模な装置をワンストップで開発する企業



「できること」から「やるべきこと」へ

SDG株式会社 代表取締役 柏木健作氏が語る、SSP支援に込めた想いと未来

近年、企業の社会貢献活動への関心が高まる中、製造業の現場が抱える様々な課題を解決するSDG株式会社の取り組みが注目を集めている。同社は、生産設備の「困った」をワンストップで解決するプロフェッショナル集団として、生産現場の環境改善や、省エネ・省人化、IoT化といった、製造業の持続可能性を追求する事業を展開している。今回、同社の代表取締役、柏木健作氏に、SSPへの関わりについて、その経緯から現状、そして未来への展望までを深く語っていただいた

Photo : Shota Kawakami

く思うようになったんです。

特に、SSPのイベントで実際に障がい者ライダーたちがサーキットを疾走する姿を目の当たりにした経験は、柏木氏の意識を大きく変えた。「彼らの笑顔、そして走り終えた後の達成感に満ちた表情。それを見た時、これは単なる支援活動ではなく、彼らの可能性を広げ、社会全体の意識を変える、非常に意義深い活動なんだと実感したんです」。

その経験は、柏木氏自身の個人的な意識変革にも繋がった。釣り好きで、ブラックバス釣りの顧客に車椅子のユーザーもいるという柏木氏。「以前は、正直なところ、どう接していいかわからず、避けてしまいうこともありました。でも今は違います。SSPの活動のことを話したり、イベントに招待したり、積極的に関わるようになりました」。

事業成長と社会貢献を両輪で回す

柏木氏は、SSPへの支援、そしてレース活動へのスポンサーシップを「投資」と表現する。一見、費用ばかりがかさむように思えるこれらの活動が、実は事業成長の大きな原動力となっているのだ。

「レース活動は、一見するとお金を使

マレーシアで交差した二つの情熱

柏木氏とSSPとの出会いは、まさに「運命的な」と呼ぶにふさわしい偶然の連続から生まれた。

「元々は、雑誌やテレビで活躍されていた青木拓磨さんと面識があったんです。私もバイクが好きでね」と、柏木氏は当時を懐かしむように語り始める。最初の接点は、柏木氏が仕事で訪れたマレーシアだった。偶然にも、青木拓磨氏、そして治親氏、宣篤氏の三兄弟と出会う。これが、すべての始まりだ

うだけに見えるかもしれませんが。しかし、サーキットは、様々な企業の関係者が集まる、いわば社交場なんです。そこで築いた人脈から、製造現場の環境改善に関する仕事を多数受注しています」。

柏木氏は、具体的な例として、ホンダのバイクでレースに参戦していることを挙げる。「ホンダのバイクでレースをやっていると、当然、ホンダの工場や開発、役員の方々と知り合いになります。そこから、製造現場の環境改善に関する仕事をたくさんもらっています。これは完全に『投資』なんです」。「社員から『社長がバイク好きだからレースに金を使って…』と言われかねません（笑）。でも、実際にはそこで得た繋がりが事業に活かしている。だから、谷町的なスポンサーは一切していません」。

さらに、同社は企業イメージの向上にも力を入れている。「オートバイや釣りといった、カッコいいイメージを企業ブランディングに活用することで、優秀な人材を惹きつけ、最終的には『人が作る』物づくりの現場を強化していく。それが、私たちの目指す姿です」。

「まだ知らないこと」

柏木氏は、SSPの今後の活動につ

った。

その後、柏木氏は別の機会でマレーシアへ渡航した際、機内で一本のドキュメンタリー映画を目にする。「車椅子の方がオートバイに乗ってレースに出ている、そんなドキュメンタリーだったんです」。柏木氏は、その映像に強い感動を受けたという。そして、その感動を拓磨氏に伝えたところ、「実は、そういうことをSSPというプロジェクトでやろうと思っている」という驚きの事実を知ることとなる。

「柏木さん、実はね…」

拓磨氏の口から語られた、障がい者ライダーの可能性を信じ、彼らが再びサーキットを駆ける未来を実現したいという熱い想い。柏木氏は、その情熱に共鳴し、即座に協力を申し出た。「できることはやりますよ」。この一言が、SDG株式会社とSSPの長きにわたるパートナーシップの始まりとなった。

「できること」から「やるべきこと」へ

SSPへの支援を通じて、柏木氏は企業としての社会貢献のあり方について、考えを深めていったと語る。「最初は、できることをやろう、という気持ちでした。でも、活動に関わる中で、これは『やるべきこと』なんだと、強

ん。もし、自分がそうだったとしても、バイクに乗れる。そして、周りから危ないからやめておけ」と言われるのではなく、『できるよ』と背中を押してもらえ。そんな社会であってほしい。SSPの活動は、まさにそれを実現するためのもの。だからこそ、私たちはこれからも、できる限りの支援を続けていきたいと思っています」。

今年はSDGのサポートで、車両を提供してくれた。また、自動補助輪を導入することで安全性も高めた、ライダー憧れの各メーカートップエンド車輛がベースだ





公益社団法人サイドスタンドプロジェクト
代表理事 青木治親

ともに走り、
ともに笑う——
可能性は無限大

私たちサイドスタンドプロジェクト（SSP）は、「前進する、寄り添い」をモットーに、障がいを持つ方々がオートバイに乗る夢を実現するための活動を行っています。

この活動は、私の父から言われ続けた「何か人のためになることをしてほしい」という言葉が形になったものです。兄弟である拓磨、宣廣とともに始めたこの取り組みは、今では多くの仲間とともに大きな輪となり、多くの方々の笑顔を生み出しています。

「バイクに乗りたい」——この単純で純粋な想いが、時に人生を大きく変える力を持っています。障がいを持つ方々が、再びバイクに乗る体験を通して見せる輝く笑顔。それは私たちスタッフにとっても、かけがえのない宝物です。

箱根ターンバイクでのイベントでは100名以上のボランティアスタッフに支えられ、パラモトライダーの皆さんと一緒に走行する感動的な瞬間を共有することができました。多くの方々が「何か手伝おうか？」と声をかけて

くださり、この活動が少しずつ世の中に広がっていることを肌で感じています。

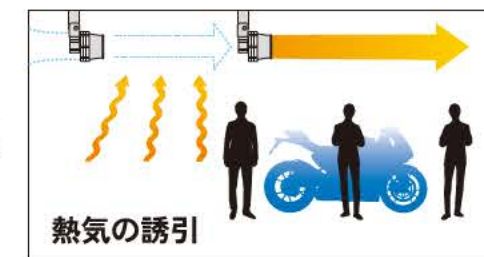
私一人ではできないことも、オートバイを愛する多くの仲間たちが集まることで実現しています。知らない人同士が出会い、「みんな雰囲気いいね」と言われるこの場所で、新たな絆が生まれています。それぞれの「できること」を持ち寄り、支え合うことで、障がいを持つ方々の「やりたいこと」を叶える——これが私たちSSPの目指す姿です。

これからも、この活動を幅広く継続していくことが私の使命だと感じています。パラモトライダーの方々、そして彼らを支えるボランティアスタッフの皆さん、支援してくださる企業の方々——すべての人がともに笑って過ごせる場所を作りたいと思います。皆さまの「支援」と「協力」を、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

“Your Move.”
次の一歩を、ともに踏み出しましょう。

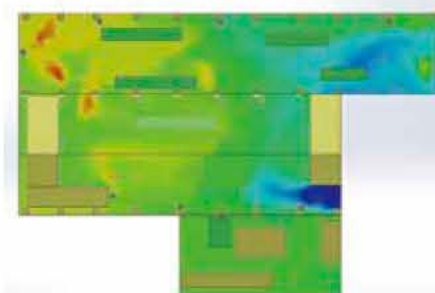


ピットの暑さをスッキリ解消！
『ウインドレーサー』で
暑い空気を外へ快適空間に！

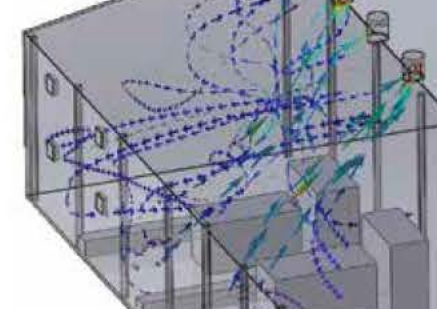


気流解析でピットや工場環境を改善！

温度の変化がわかる！



空気の流れがわかる！



浮遊粒子の動きがわかる！



**ちょこっと
エンジニアリング**
気流解析サービス

様々な空間の動きを見える化！
工場内の問題点を**発見&解析**し、
最適な環境改善をご提案します！

SDG株式会社 <https://www.sdg-eng.com/>

お問い合わせ先



SDG

パートナー企業

※順不同

BRIDGESTONE

MAEDA
JYUKOUYOU

MICHELIN

SDG

菅原モデル

BMW
MOTORRAD

KTM

CYCLE
JKA Social Action

Auto Race

アネスト岩田 ターンバイク箱根

阿部建設株式会社

株式会社上野工業所
UENO INDUSTRIAL CO. LTD

ファインモータースクール

RUN

古本重機運輸
FURUKI JUNK UNYU

茶

SODEGAURA
FOREST RACEWAY

SUZUKA CIRCUIT

TRIYA

WAKOS

全軽自協

アマンテラス

Arai

BEYOND みんなで競に行こう。
パラスポーツ

HYOD

AFG
MOTORSPORTS

J-TRIP

Kabuto

KOMINE
SAFETY & INNOVATION

MFD

SDG

SHOEI
PREMIUM HELMETS

SYGN HOUSE

TAICHI

寄付のお願い

サイドスタンドプロジェクトでは
オートバイで障がい者に
“夢”や“希望”を与える活動に努めています。
この活動は企業サポーター及び
個人寄付金で運営をしています。
オートバイを愛するあなたの力で
一緒に障がい者の夢を叶えませんか？

企業・個人定額寄付金

ssp.ne.jp/support

お気持ち寄付

住信SBIネット銀行

法人第一支店 普通 1396121

お問い合わせ先

Tel : 042-785-2299

Mail : ssp@ssp.ne.jp

Webサイト : ssp.ne.jp



Your Move!



042-785-2299 | ssp@ssp.ne.jp | ssp.ne.jp



この冊子はオートレースの補助事業を受けて制作しました